
スイサイド

とみー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイサイド

【Nコード】

N5077N

【作者名】

とみー

【あらすじ】

きっかけはこのニュースだったと思う

「……死体が発見されました。死体の身元は高橋和美さん20歳大學生と見られており……」

その日から俺の人生は変わった、いや変わらざるをえなかったといった方がいいのかもしれない。これからうまく生きていけるのかは分からない。それでも精一杯頑張っていこうと思う。

守るべきものが俺にはあるから…

幕開け（前書き）

全然他の小説書けてないのに書いてしまいました。忙しいですが、時間があれば更新していきたいと思っています。よろしく願います。

幕開け

よってらっしゃいみてらっしゃい。

今宵紡がれますは、ある若者の物語。

つい先ほどまで幸福というレールを歩んでいた若者の人生は

まさかまさかの脱線をしてしまいます。

眼前で愛しき人を失うという形で……

そしてこの世に絶望した少年はあろうことが
身投げという形で自分の人生を散らしてしまいました。

多大なる哀しみと憎しみを胸に秘めたまま……

しかし、この物語はこれで終わりではありません。
かといって私がこれ以上お話することもできません。

なぜなら

この物語はこれから紡がれていくのですから。

いやはや、この物語の終着点はどこなのでしょう。

さて、

それでは今日もまた幕開けと参りましょう。

はじまりはじまり
...

始まりは突然に

『おはようございます。朝のニュースの時間です。』

寝ぼけながら居間に出てくると、母親が既に台所に立っていた。父親の方もソファに座りながらニュースを見ている。

『続いてのニュースです。昨日南越市のビルの前で死体が発見されました。死体の身元は高橋和美さん20歳大学生と分かっており、警察はこれを自殺を図ったとし、調べを続けています。』

「最近多いわねえ。」

母がフライパンに卵を落としながら、今のニュースに対して呟く。

「また、うちの街か…どうしちゃったんだろうなあ、昔はこんなことはなかったはずなのにな。」

父の方も母の言葉に応えるように呟く。

「また、いじめとかが原因じゃないの。」

あくびしながらのんきに答える。

「あら、爽太起きてたのね。おはよう。ご飯もう少しでできるから椅子に座って待ってて。」

そんな爽太に優しく微笑むといそいそと朝食の準備を再開した。

「おはよう、母さん。」

「いじめかあ。最近の奴らの手口は陰湿だからなあ。男ならちゃんと正面から向かい合えてんだ。」

「いやいや、男とは限らないし。」

朝から熱く語る父に面倒くさそうにつっこみをいれる。

「おう爽太、おはよう。ねむそうだな。」

「おはよう、最近部活の練習きつくて疲れが取れないんだよ。」

「そうか、がんばってるみたいだな。どうだ、今年はいいところまでいけそうか？」

「どうだろうね。できれば全校応援のあるベスト8ぐらいまではいきたいところだけだ。」

「けっ、男ならベスト8とかちっせー目標じゃなく？優勝する」ぐらい言ってみるよ。」

「俺は現実主義者なの。リアルリスト そんな突拍子もないことは言いません。」

「全く、夢のねえガキだ。パパは悲しい。」
そう言って乙女のように顔を両手で覆う。

「やめろ、気持ち悪い。吐き気がする。」

「母さん、爽太がぐれちまった。」

「あらあら、駄目よ爽太。言葉遣いにはきをつけなさい。」

「はあ、朝から濃すぎる。」

そう言って溜息をつく爽太。

「全く、なぜこんな風に育ってしまったんだ。」
全くわからないといった風に頭をふるバ力親父に

―プチッ―

「てめえのせいだろうが、バ力親父!!!!」
閑静な住宅街にそんな叫び声が響き渡った。

「はあ、疲れた。」

登校中爽太はぐったりと呟いていた。

あの後、当然最期の言葉で怒った父と口争いになり、いい加減に業を煮やした母の鉄拳制裁をお互いに食らう形で終了となった。

「はあ。」

「おーいそうちゃん。」

今日一体何度目かという溜息をついていると後ろから声がかかった。振り返ると幼馴染の七瀬藍が息を切らせて立っていた。

「ねえ、何で今日は私を置いていったの？」

顔を見るとなんだか？ムッ”という効果音が似合いそうな感じで頬を膨らませていた。

「悪い。朝からいろいろあって忘れてた。」

「あらあ、私のことなんてそうちゃんにとってはいろいろあつただけで忘れられる存在なのかしら。」

さつきより不機嫌オーラが増した気がする。

「ええ、なんでそんなことに！」

「お母様に言いつけてやる。」

「ちよつ待つ、母さんだけは！というか俺がお前のことを忘れるわけないだろう。むしろ俺の頭の中はお前でいっぱいだ。」

「ほんと？」

「ああ、ホントだ。だから落ち着いてそのどす黒いオーラを収めてくれ。」

その一言でいつもの藍に戻る。実は藍とは幼馴染だけの関係ではなく、彼氏彼女の関係でもある。しかも結婚を前提とした。青木家である爽太の家と七瀬家である藍の家はお隣さんで親同士の仲もよく、爽太と藍も付き合っていたためそのような経緯となった。よくお互いの家を行き来しているせいか、爽太の母と藍は特に仲が良く最近藍が母に似てきているのが今の爽太の悩みの種である。

「ねえそうちゃん、朝のニュース見た？」

「自殺のことか？」

自殺以上に目立つニュースはいくらでもあつたが、なんとなくそのことを言っているようなきがして言った。

「うん、よくわかったね。」

「なんとなく。それに最近よく見かけるし。」

「そうなんだよね、最近そういうニュースが特に多いような気がする……少し不安。」

「まあ、でも俺にはお前がいてお前には俺がいる。何があってもお互いに支え合えばそんなことにはならないよ。もし、周りにそんなことになりそうな奴がいたら俺たちが支えてやればいい。」

そんな不安を打ち消すように笑顔で、そして力強い声で爽太は言った。

「そうだね、私にはそうちゃんがいるもんね。」

そう言って強く拳を握っている姿はなんとも愛らしい。

「そうちゃん。」

「ん？」

「ありがとう。」

少し照れて紅くなりながら言う藍は何とも言えない可愛さがあった。

「可愛すぎる、こんだけ可愛いんだ。突然抱きしめても仕方ないよな。うん、仕方ない。」

全く理由になっていない言い訳を考えながら、周りを見回す爽太。幸いさっきの家でのやり取りで早く家を出てきたため周りには誰もいない。

——今しかない。

そう思い抱きしめようとしたところで…

「おっはー、今日も仲良く2人で登校とはあつついねー。」
振り返るとそこには爽太と同じ野球部員の高田洋が立っていた。

ー コロス、コイツコロス。

「えっ、なんでそんな虫けらを見るような目で俺を見るの。というかそのダダ漏れの殺気は何？」

ー ほぼ鈍いかと思えばこの殺気に気づくとはな。なら話は早い。

「そんなの決まっているじゃないか。君を殺すためだよ。ただ、ちよつとどうやって殺すか迷っていてね……あ、そうだ君に決めてもらおう。今からいくつか候補を言うからその中から選んでくれ。」

「い、生きるという選択肢は？」

「ない。じゃあ言うぞ、絞首刑、火あぶり、撲殺、………
さあ、どれがいい？」

良い笑顔で尋ねる爽太。

「ぜーんぶきやつかああああ。」

「よし分かった、バラバラの刑な。今日は特別に刃物をノコギリにしてあげよう。指から一つ一つ丁寧に切ってやるからな。ありがと
く思え。」

「そんな親切いらんわあ。」

そんな洋の耳に天の助けのような声が届く。

「そうちゃん一旦落ち着いてよ。」

「さすが七瀬、お前なら止めてくれると思っていたよ。……ん、一旦?」

「今は一応デートのようなもんなんだよ。今は2人の時間を楽しまなきゃ。だからそんなくだらないことは学校についてからやってよ。」

「俺のさっきの気持ちをかえせえエエ。」

そんな洋の叫びは青空の中へ消えていった。

時間は過ぎ放課後（洋は反省しているようだったので半殺し程度に済ませておいた。なにやら『理不尽なあ』とかなんとか言っていたが）部活も終わり一人帰っていた。いつもなら何人かの仲間と一緒に帰るとこなのだが、今日は大好きなコミックの新刊の発売日だったので書店へと寄るため別の道を選んだため一人帰ることとなった。

「それにしても間に合ってよかった。あと少ししか残ってなかったし。」

コミックの入っている袋を見ながらニヤける爽太。

「そうと決まれば、早く帰って読まないとな。」

そうして足を早める爽太の目につつすらと白線のようなものが目に映った。

「そつか。そついやニュースでこのあたりって言ってたな。ちょうどここに死体が…」

段々気分が悪くなってきた。足元をよく見るとどす黒い血のような染みがあるのが分かる。

そのときふと後ろに何か気配を感じた。

—大丈夫だ、誰もいない。大丈夫。

そう自分に言い聞かせ、勇気を振り絞って振り返る。

「誰も……いない。」

ホッと一息つき、前に向き直った瞬間、

「つつっん！」

声にならない声が口から洩れていた。

爽太の視線の先には…

今朝ニュースで見たはずの自殺した女性、高橋和美が立っていた。

始まりは突然に（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございました。

一歩

「くそつ、早すぎる。ホントに人間か。」

爽太は夜の街の中を息を切らせて走っていた。前方には女性の背中が小さく見える。

「……何が起こってるんだ？」

さつきから疑問は尽きることはない。どんどん浮かんできてはすぐに消えていく。それは仕方のないことだろう、なにせ今爽太が追っている女性はテレビで死体で発見されたはずの高橋和美、その当人であつたからだ。

もう追いかけて始めてから5分くらい経っただろうか。前を走る和美の足は止まることはない。それよりも先ほどから新たに疑問が浮かんでいた。

「……おかしい。」

和美のことを指しているのではない。確かにそれもあるが今は別のことが原因だった。

「誰もいない……」

そう、誰もいないのだ。まだ時間は9時にもなっていない。表通りとは少し離れた裏の通りとはいえ、通行人が誰もいないのはあり得ない。その証拠にこの前この時間にここを通ったときは人はまばらだが確かにいた。

——不気味だ。

死んだはずの女性に不自然なほど人のいない通り、爽太は自然と

唇が渴くのを感じていた。明らかに危険な方へと足を踏み込もうと
しているのに女性を追いかける足は止まるどころか、先ほどよりも
早く動いているように感じる。人の死に関わるなのに不謹慎ながら、
なぜか興奮を覚えていた。それはまるで自分の知らない未知の世界
へと身を投じる赤子のようなものだろう。

ふと和美が左の方へと曲がった。

―逃がすかよ。

急いで左の角を曲がると、そこに和美らしき人影はなかった。そ
れどころか先ほどまで全くといっていいほどなかった人の姿もちら
ほら見受けられた。

「…一体なんだったんだ。」

その呟きは闇の中へと溶けて行っただけだ。

明くる朝、爽太はソファに座ってボーッとニュースを見ていた。
結局昨日はほとんど寝ることができなかった。どうしても昨日で
あった女性、高橋和美の姿が頭から反れなかったためだ。完全に鼻
はひしゃげており、左目は完全に潰れていた。骨格は左半分が完全
にへこんで変形していて、顔全体が血でどす黒く染まっていた。写
真で見た姿が可愛らしかっただけにその変わりようはすさまじかつ
た。よく一目で和美と判断できたものだ。

しかし、昨日眠れなかった原因はそれだけではない。爽太は出会
った瞬間、全身の血が凍るような恐怖と明確な殺意を感じていた。
しかし、和美はこちらの顔を見た途端、

『あなたは……ち、がう。』

という踵を返し、いきなり走りだしていった。

ひどく、本当にどこまでもひどく無機質な声だった。しかしなぜだろうか、爽太にはそれがとても哀しげに聞こえた。……そう

――私は何をやっているの……

というように。そして気付いたときはもう既に彼女の背中を追って走り出していた。

「あなたはちがう……か。」

爽太が再び思考の海へと沈みボーっとしていると耳に気になる二コースが飛び込んできた。

『……次の二コースです。昨夜午後11時ごろ南越市におきまして遺体が発見されました。遺体には鈍器で殴られたような痕が残っており、警察では鈍器で殴られ気絶したあとビルから突き落とされて殺害されたのではないかと見て調べを進めています。また、遺体の身元は篠塚知恵さん20歳大学生と分かっており、一昨日同じ場所で自殺した高橋和美さんと同じ大学に通っており、関連性がないかどうかこちらの方も調べを進めています。さて、次は今日の天気で……』

なぜだか分からないが昨日出会った高橋和美が関係していると思っ
った。

「なあ父さん、バカなこと聞いていいか。」

「なんだいきなり、お前のバカは今に始まったことじゃないだろ。」

ほれ、言ってみる。」

「……死体が動くことってあると思う？」

「……母さん、爽太が壊れちゃった。」

本当に深刻そうに母に助けを求める。

「だよな、あるわけないよな。ごめんごめん、今の冗談だから忘れてくれ。」

誤魔化すように笑う爽太。

「全くだ、ただのバカから取り返しのつかない超バカになってしまったかと思っただぜ。」

かつかと笑ういつも通りの父になぜか少し安心感を覚えた。

「藍、お前って死体が動くと思う？」

「え？」

訳の分からない唐突な質問に思わず掴んでいた海老フライを落としてしまう。

「いやだから、死体って動くと思うか？」

「突然どうしたの。」

藍はいぶかしむようにこちらを覗きこむ。

「いやなんとなくな……で、どうなんだ？」

「うーん…動かないと思うけど。」

「そっか、サンキュー。今の会話聞いてたか？お前らはどう思う？」
隣で昼食をとっていた仲間にも聞いてみる。

「ねえだろ。」

「俺はその話を聞いた瞬間お前が壊れたと思ったけどな。」
「俺もないと思う。あつたらあつたで怖い。」

「そうだよな。サンキュー。」

予想通りの返答だった。別に何かを期待していたわけではないが
改めて皆から言われると少し落胆してしまった。

「俺はあると思うけどな。」

「本当か、永井！」

予期せぬ言葉についつい大声を出して反応してしまう。

「いや、別にあるとは言ってないぞ。あるんじゃないかと思うだけで。
お前らみんなゾンビって聞いたことあるだろ。」

全員が頷く。

「そのゾンビも生きた死体だ。」

「でも、ゾンビってよくRPGゲームなんかででてくるような空想
の生物だろ。」

永井の言葉に洋が意見する。

「まあそうだな。これは前テレビで出てた話なんだけどさ、どっか

の国ではゾンビをみかけたって事例がけっこうあるんだ。それとも1つこれもテレビで見た話なんだけど、今の日本はさ死んだら火葬が多いだろ。でも昔は土葬も多かったんだ、今でも土葬のところもあるけどな。で、本題はこっから……」

そういうと永井は声のトーンを下げる。

「これはある田舎の村の話、その村ではよく川辺でホタルを見かけるっていう話でな、ある青年もそのホタルを見るためにホタルを見かけるという川辺に向かっていたんだ。

でも1つ問題があった。その川辺に行く道の途中に大きな墓地があったんだ。そんでその青年が怖がりながらもその墓地の前も足早に通ろうとしたその時、ふと耳に

―ザクツ、ザクツ

という音が聞こえた。墓地に踏み込むのは正直怖かったが、その青年は好奇心に勝てず、その音のする方へ近づいていった。するとある墓の下から音がなっていることに気付いた。今にも逃げ出したい恐怖にかられたが、それでも気になってその音のする墓地を見ると、目が闇になれたせいか土が他の所より盛り上がっているように感じた。そして、音はそこから段々と大きく聞こえてくる。

…ザクツザクツザクツザクツザクツザクツザクツザクツ……

そして遂に何かが出てきた。

『…かみ?』

そうそこから覗いていたのは真っ黒な髪だった。思わずそこから数歩後ずさると次に白い人肌らしきものが見えた。その瞬間……

ギョろ…

いつの間にか目の前には血走った両目が覗いておりこちらを強く強く凝視していた。

『……………て…』

『……………え？』

顔を背けて耳を塞いでいたので聞き取れなかった。

『たすけ……………て。』

振り返ると土から生えたような生首がこちらを未だ凝視していた。

…

…

…

……………

つていう話なんだけどな。」

いきなり明るく言う永井。

「ただの怖い話じゃねえかあ。」

情けない声で洋が言う。

「バカ野郎！ちゃんと話の中に生きた死体らしきものが出てきただらう。」

今の永井の言葉に爽太は違和感を覚えた。

「らしきってのはどういうことだ？生きた死体じゃなかったってことか？」

「ご明察。この話にはまだ続きがある。」

永井が満面の笑顔で答える。

「その後、青年は村に走って戻り事情を伝え墓地に戻ってきた。その生きた死体を退治するためにな。そして着いてみて神主がお祓いをしても何の効果もない。だからといって直接危害を加えては自分たちに呪いが及ぶ可能性があるため村人たちはなかなか実力行使に出れなかった。そう悩んでいると、一人の村人があることに気づく。『こいつは昼に埋めたはずの娘ではないか。』」

とな、改めてよく見ると確かにその生首は昼に土葬されたはずの娘であった。

とりあえず急いで娘を土から掘り起こし、神主が化けの類かどうか確かめてみても何も怪しい点は見られない。村医者に見せても何の異常もなかった。つまり、青年が生きた死体だと思った娘はただ息を吹き返しただけの普通の人間だったというわけだ。昔はこのような出来事も稀にはあるがあったらしい。つまりだこっちでの話は死んだ死体じゃなく、息を吹き返した人間だったこと。」

「なるほどな。そういう話もあるんだな。」

爽太は永井の博識ぶりに素直に感心していた。

「まあ、二つ目のはただ話したかっただけで少しだけ視点がずれてしまったが、中国のキョンシーしかり

ネクロマンシーが扱う死体など、そういう話はいくらでもある。だから一概に生きる死体がいらないとは言えないと思う。」

満足そうに永井が話し終える。

「伊達にメガネかけてないな。」

洋が感心しながら言う。

「洋、今までの会話にメガネは関係あったか？」

「いや…ほら、ああもう次の授業始まるぞ。俺先に行ってるな。」
永井の凄みにビビって逃げていった。

「ホント調子のいい奴よね、洋って。」
呆れながらいう藍。

「さあ俺らも授業行くか。」

「そうだな。」

みんなで教室に帰っていると永井が話しかけてきた。

「ソウ、さっきはなんか一人突っ走ってあんなこと話したけど一体どうしてあんな質問してきたんだ？」

「いや、藍と話してた時にも言った通りただなんとなくだ。」
無理やり誤魔化す。爽太は自分の咄嗟の対応力のなさに一人落胆する。

「まあいいんだけど。なんか困ったことがあったら言えよな、力になれる保証はないがそのときは協力する。」
照れもせず無表情にそんなことを言う。いや、むしろ照れているからこその無表情なのかもしれない。

「ありがとよ。」
そんな友達の純粋な好意に爽太は心の底から笑顔で感謝した。

あれから4日が経った。和美を見かけた日から爽太は毎日のように和美が飛び降りた現場へ足を運んでいた。だが和美に出会うことはなかった。

—今日行つて何もなかったらもうここに来るのはやめよう

そう心に決めてまた和美が飛び降りたビルの前にやってきた。

—今日も何もなしか…

爽太は肩を落とす。そしてふとそんな落胆している自分に気づく。

「俺は何を期待してたんだろうな。」

自嘲気味に呟く。自分は死が関わっているこんな状況に何を求めているのか。何か自分の嫌な面が見えた気がした。

—もう帰ろう。

そう思い顔を上げたところで違和感を覚えた。そう、これは和美を追っていた時と全く同じ

「誰も…いない。」

前にも後ろにもどの通りにも人影が見えない。

—まさか…

緊張して唇が渴く。心の底から湧き上がるのはではなく得体のしれない高揚感。その高揚感が少しずつ首を後ろへと動かしていく。先ほど後ろにあったのはビルと通りの闇を照らす街灯のみ。しかし、爽太は感じていた。

― 確実にいる。

それはもう確信に近いものであった。

そして、後ろに見えたのは以前見た姿ときと全く同じ格好をした高橋和美だった。

「やっと会えた。」

口から出てきたのは自分でも予想外の言葉だった。

この日、青木爽太は間違いなく先の見えない未知の世界への第一歩を踏み出した。

一歩（後書き）

とりあえず書きすすめていたらこんな感じになっちゃいました。
最期までお読みくださりありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5077n/>

スイサイド

2010年11月18日07時30分発行